

● 序章

◎宮沢賢治思想の中核を探る

盛岡高等農林学校で賢治を育んだものは、一つは農芸化学の知識技術であり、もう一つは同人誌「アザリア」による文学開眼で、残る一つは法華経との出会いである。この三つのうちの一つを欠いても後の賢治の姿は無かった。三つのうちでもっとも重要なものは法華経の影響である。法華経との出会いが無ければ、今日我々の前に残されているような賢治像は存在しなかったであろう。

法華経こそが賢治を賢治たらしめ、賢治の思想、実践行動、表現活動のすべての中核であり、そのことを理解しないで、賢治を理解したと称することは錯誤以外の何物でも無い。

しかも従来の賢治論で、もっとも欠けていたのは、賢治と法華経の関連についてである。その理由は法華経そのものが難解であるのに加え、法華経が我々の手から離れてしまい、最初から法華経を読んでみようという意欲を失ってしまうからであろう。

多くの研究者や評論家は、賢治と法華経の関係を無視したり、敬遠したり、避けているのではないだろうか、しかも法華経を無視しては、賢治像を半分しか理解していないのである。

一方日蓮宗に限らず仏教関係者は、賢治作品の中から自派の宗旨や布教に都合の良い部分のみを取り上げる傾向が見られ、賢治を聖者として偶像視する機縁にもなっているようである。

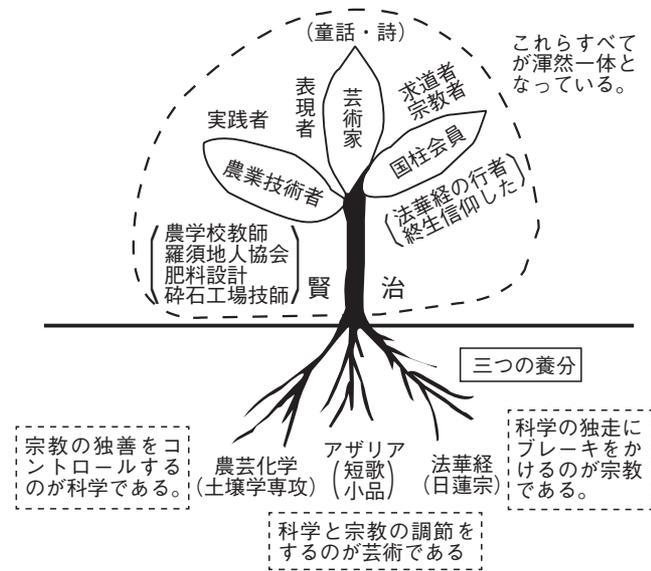
次図(図表1)は法華経、自然科学、芸術の三つの関係をまとめたもので、宮沢賢治が盛岡高等農

林学校という土壌から、肥料の三要素の窒素、リン酸、加里に相当する農芸化学とアザリアと法華経という養分を吸収し、農業技術者、芸術家、法華経の行者として成長していたことを示している。

自然科学優先、技術万能、合理主義一辺倒の社会では、経済的に恵まれるにせよ、人間性が踏みつぶされ、砂漠のような無味乾燥なものとなり生き甲斐とか生きる喜びは無くなるだろう。

宗教優先の社会では、ともすれば独善と偏見に走り、高尚な理想を称えても、それを実現する手段が無ければ画に描いた餅に終るだろう。

宗教が掲げる理想を実現するために、それにふさわしい科学技術を持た



図表1 〈盛岡高等農林学校という土壌〉

ねばならない。

宮沢賢治には、法華経によって与えられた娑婆即寂光土の理想を此の世に実現するための手段として盛岡高等農林学校に於ける農芸化学科三ヶ年、研究生二ヶ年合せて五ヶ年にわたる学習で身につけた土壌肥料の知識技術があったのである。

一方では、難解な法華経の教養を誰にでも分かりやすく伝えようとして、数々の童話を書いたのである。これらは密接なつながりがあつて分かつことの出来ないものである。

現在の物質文明は人間中心主義で、人間が繁栄し豊かな生活をするためには、何をしても許されるという考えが主流を占めている。

その結果地球上には、さまざまな荒廃が目立ってきた。弁証法によれば「量的な変化は、質的な変化をもたらす」と言うが個々の汚染は少量でも地球規模にな

図表 2 〈環境破壊〉

食物	農業	水			空気						
		食品添加物	海水 (廃油・プラスチック)	地下水 (トリハロメタン等)	水道水 (トリハロメタン等)	浮遊物 (重金属・アスベスト)	フロンガス放出	森林伐採・燃料消費	石炭・石油の燃焼	原水爆実験・原発	
食品添加物	農薬 (有機塩素剤 除草剤等)	癌	魚類汚染	ハイテク公害	水質汚染	中毒・癌	オゾン層破壊	地球温暖化	二酸化炭素増加	光化学スモッグ・酸性雨	死の灰・放射能障壁

ると人類の生存を脅かすに至る。次図(図表2)は環境破壊の現状を整理したものである。

大気汚染は、一連の原水爆実験の後遺症による放射能汚染、あるいはチェルノブイリ原子炉事故による死の灰。工業化により石油石炭の燃焼による光化学スモッグや酸性雨。宮沢賢治が「みじくも」で「スコードリの伝記」で予言した「二酸化炭素の増加による地球温暖化と海面上昇、砂漠化。フロンガスによるオゾン層破壊による紫外線増加などがあげられる。

水道水も地下水も水質汚染の脅威にさらされ、安心して水も飲めなくなった。

農薬の多用、食品添加物の増加による植物の汚染も甚だしい。

これ等はすべて人間の飽くなき欲望が生み出したものである。人類は自滅するであろうか、自分さえ良ければ他人はどうでも良いという自己中心の利己主義が横行し、凶悪犯罪が多発し、此の世が地獄の様相を見せ始めている。

地球上のこのような闘争の世界を、賢治は修羅の世界と考え、あらゆる生物が、お互いに殺し合い傷つけ合い、生き物が他の生き物を殺さねば生きてゆけない宿命であるが、無駄な殺し合いを止めて、生命を保つ最低の糧を得るだけで満足し、いたずらに無益の殺生を止めようと、その作品で説き、且つ自分自身でそれを実践したのであった。

賢治は生前に童話集『注文の多い料理店』と詩集『春と修羅』の二冊を自費出版したのみで、その他新聞、雑誌に僅かの作品を発表しただけで殆ど無名であったが、今や数種類の「宮沢賢治全集」が出版され、賢治研究会も全国で十指に余る。また最近では月に平均一冊ずつの賢治研究書が出版され

ている。

無名の中で死んだ賢治が死後六十年過ぎて益々愛読者が増加してゆくのは何故か、賢治作品の美しさ、清らかさ、自然科学の深い知識に裏つけられた確かな表現、法華経の心を深く湛えた宗教性などが、物質文明の破綻と自然破壊がもたらす危機感に脅える人々の心を慰すオアシスとして、或いはその救いの啓示として、今賢治が再確認されて賢治ブームが到来したのである。

しかし賢治の作品は童話という形をとっていても、多くの人々にとっては、かなり難解である。一読しただけでは真意を把握できないものも多い。それはなじみにくい自然科学用語を用いたこと、幻想的な表現をすること、背後に法華経の精神が流れていることなどがあげられる。

法華経が僧侶に独占されるようになったから、一般の人が法華経に親しむということが少なくなつた。法華経を読誦し、理解すれば、賢治の作品の背後から広大な宇宙が現れてくる。

古来からの日本文学に及ぼした法華経の影響は甚大なものがあり、数え切れない多くの作品がある。筆者も宮沢賢治を知らなかつたら法華経に触れる機会は無かつただろう。宮沢賢治によって法華経に導かれたのである。

賢治の作品を読み、真に理解するためには法華経を知らなければならぬことに気がついた。幸に岩波文庫に坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』があり、手に入れて座右に置き、折にふれて読誦している。

◎法華経はどんなお経か

法華経は、自ら読誦しても、他人の読誦するのを聞いても深い感銘を受ける、読んでみると、むしろ文学的と言っても良いのではないだろうか。筆者は二十代の頃一時アンドレ・ジイドやドストエフスキーに熱中し、その時やはり、それ等の作品を理解するには、聖書を読みキリスト教を知らなければならぬと感じ、新約聖書のルカ伝などを読んだ時の興奮が法華経を読んだとき蘇つたのである。

岩波文庫版は訳文が美しく分かり易く、偈の部分は流麗で朗唱するにふさわしい。こんなに分かりやすい美しい文章を僧侶は何故誰にも分からぬように読経するのか、分からない方が有難がるかとも思っているのかと、いつも不思議である。死者を葬るときに読経するよりは、生きている内にこそ読むべきである。

原文の美しさを味わうには、口語訳よりも書き下し文の方が好きである。また法華経と言うと日蓮宗と短絡的に考える人が多いが、日蓮宗以外の宗派でも重要な経典とされ、「諸経の王」と言われる程尊崇され、重要視されている。

法華経の特徴のひとつとして「経卷受持」がある。法師功德品第十九の中に「法華経を受持し、誦み、誦し、解説し、書写すれば大きな功德を得る」とある。

賢治が臨終に際して「国訳の妙法蓮華経を一、〇〇〇部つくってください」「……それから、私の一